千葉経済大学短期大学部
研究紀要　第16号　41～50（2020）
研究論文

図書館員としての高津親義

松田　典之

Chikayoshi Takatsu as a library clerk

Noriyuki MATSUDA

Abstract

Chikayoshi Takatsu was a chairman in Narita library. Takatsu's awareness as a librarian included the establishment of a taxonomy of Buddhist books and the spread of library knowledge. Takatsu insists on a classification system based on the Daizou Sutra classification rather than the decimal classification for Buddhist book classification. It's big that Takatsu took charge of punctuation of "the reduced-size printing complete collection of Buddhist Sutras, Laws and Treatises", and this thing influences. Takatsu made an effort toward establishment of Chiba-ken library society, a lecturer of a library workshop, guidance to other libraries and the spread of knowledge about a library. Knowledge about a library spread in Chiba-ken by this. This is the biggest achievement as Takatsu's librarian.

Key-words
高津親義　成田山仏教図書館　私立図書館　千葉県公共図書館協会　成田清聚学院

１．研究の背景・目的

本論で扱う高津親義(以下、高津)は、千葉県成田市にある成田図書館（現、成田山仏教図書館）で、明治、大正期に活躍した図書館員である。高津については、大野政治が多くの著作で、その功績について紹介している。また、高津の仏教関係の著作の多くが、神崎照恵によって高津の死後に発表されている。高津の評価は、「成田不動信仰の教理体系の組織に努力した」[1]「千葉県における視覚障害者教育者の先駆者」[2]「初期の成田図書館を支え育てた教養人」[3] である。しかしながら、高津の図書館界、特に千葉県の公共図書館への貢献について書かれた学術論文はない。

本論では、高津の生涯を明らかにすることで、高津の図書館員としての活動の再評価を試みるものである。このことは、初期の千葉県図書館史を考える上で有益であると考える。研究方法は文献調査である。文献資料を収集し、それに基づいて研究を行う。

２．放浪時代

高津は、成田図書館主任になるまでを、放浪時代と呼んでいる。[4] この章では、放浪時代を、出生から智山東黌入学と成田図書館主任になるまでの２期に分けて述べる。

2.1　出生から智山東黌入学まで

高津は、1860（万延）元年、新潟県西頚城郡源八新田で高津茂兵衛の５男として生まれている。[5] 源八新田は国上山の西麓に位置し、付近には信濃川大川津分水路が流れている。現在は新潟県燕市に属しているが、明治以降、西頚城郡源八新田→西頚城郡国上村→西頚城郡分水町→燕市と属する自治体が変遷している。西頚城郡一帯は、浄土真宗の信仰が盛んな地域であるが、旧分水町域は。真言宗豊山派の国上寺を中心に真言宗寺院が比較的多い。[6]

高津家は、柿本人麻呂に仕えた視覚障害者で、人麻呂終焉の地である石見国高津山に、その姓の由来があると

いう。[7] また高津家は信仰心に厚い家で、国上寺の塔頭である本覚院二世である良悟上人は、高津家の出身であり、国上寺の西国八十八箇所巡りの石塔の建立にも、高津家が関わったと伝えられている。[8]

高津は、２歳の時に父を失い、母に育てられた。７歳から家庭で四書五経の句読を受けた。[9]

1867（慶応４）年４月下旬に、長岡城の攻防戦を中心に北越戊辰戦争が始まった。旧分水町地域は会津藩の勢力下にあり、歩兵約200人が駐屯し、地域住民は饗応や物資の運搬に徴発された[10]。高津は、戦禍を避けるため、３年間、国上寺に避難し仏縁を結んだ。[11]

長善館は、越北之鴻都と称され、長岡藩領粟生津村（現、新潟県燕市）に、鈴木文台が1850（天保４）年開塾した私塾である。[12] 高津は、13歳の時に長善館に入学し漢学を学んでいる。[13] 当時、僧侶は地域の教養人で、長善館には多くの僧侶が入門しており、こうした私塾で基礎的な学問を学び、専門の学塾に進むのを通例とした。[14] しかしながら、高津の名は、長善館の、1884（明治17）年までの門人名簿である「長善館門人姓名簿」にはない。[15]

当時の館主は、鈴木惕軒であった。鈴木惕軒次男の鈴木柿園（通称、鹿之助）は高津と同じ1860（万延元）年の生まれである。[16]

2.2　成田図書館主任になるまで

2.2.1　智山専門学林東黌

1877（明治10）年８月、真言宗智山派は宗派の教育機関として「智山専門学林」を設置した。「専門學校假規約」によれば、東西二京に２校設立し、西黌を京都、智積院に、東黌を東京、牛込南蔵院（実際には、東京芝愛宕町の真福寺）に置くとされた。宗費生は50か寺に１人選出され、東西両校に30人在学した。学課は初級から九級まであり、１級の卒業は５か月と定められた。六級を卒業すると、支校の教師に任じられる場合があった。[17] 高津は、18歳の時に上京し、智山東黌に学んだ。その後、東黌の助教になっていることから、少なくとも六級は卒業している。[18]

同じ頃、茨城県なかみなと市にある華蔵院の院主であり、真言宗東京事務出張所執事であった磨智純能の室に入り、遍能と称した。[19]

2.2.2　苦学

高津の学資は、母親から仕送りしかなく苦学した。そのため、前述したように、母校の助教になり、また攻玉社の嘱託にもなっている。攻玉社は、鳥羽藩士であった近藤真琴が創立した、当時珍しい理数系の教育機関である。当時は芝神明町に校舎があった。攻玉社には、鈴木惕軒次男の鈴木柿園も1877（明治10）年に入学しているが、管見では、鈴木柿園関係資料及び攻玉社関係資料に高津の名は見当たらない。[20]

また、高津は「明教新誌」に寄稿して学資を補なったとされる。「明教新誌」は大内青巒が1874（明治７）年に創刊した仏教新聞である。「明教新誌」には、管見では高津名義の記事は見当たらないが、筆名あるいは無署名で投稿したのであろうか。

高津は1880（明治13）年冬から1881（明治14）年の春にかけて、成田山新勝寺の食客となっている。[21] また上京後、様々な師について儒教、仏教を修めたとされる。

2.2.3　縮刷大蔵経

大蔵経とは、仏教の典籍を集成したものの総称で、一切経ともいう。三蔵、すなわち仏陀やその弟子の教えである経蔵と、教団の戒律・規定を収める律蔵、仏陀の教説を論議・研究した論蔵を中心として、これに後代の仏教者の著述を加えて集成したものである。[22]

徳山藩士で、明治維新後、教部省、内務省の要職を歴任した島根蕃根は、弘教書院を創立し、後述する増上寺の福田行誠とともに「大日本校訂大蔵経」（「縮刷大蔵経」とも呼ばれる。以下「縮刷大蔵経」）を企画した。「縮刷大蔵経」を出版するに当たり、各宗派より、校合委員として約50名の学者を集めた。飯島道宝、天台宗の櫻木谷慈童、華厳宗のちに浄土宗の円随などがいた。[23]「縮刷大蔵経」の分類は、大体において、明の智旭「閲蔵知津」によっている。まず全体を１．経蔵、２．律蔵、３．論蔵、４．秘密蔵、５．雑蔵に分け、経蔵を大乗経、小乗経に、律蔵を大乗律、小乗律に、論蔵も大乗論、小乗論に分け、秘密蔵は録内、録外に、雑蔵は支那撰述と日本撰述に分ける。さらに経蔵の大乗経は華厳部、方等部、般若部、法花部、涅槃部に分け、論蔵の大乗論は、印度大乗宗経論、印度釈教論、印度諸論釈、小乗論は、印度撰述小乗論、印度雑部に分ける。秘密蔵の録外は、享保録、享和録、

十五経、四部軌其他、知津部に分ける。雑蔵の支那撰述と日本撰述は、それぞれ、経疏部、論疏部、懺悔部、諸宗部、伝記部、纂集部、護法部、目録部、音義部、序讃詩歌部に分け、さらに諸宗部を三論宗、法相宗、華厳宗、天台宗、浄土宗、禅宗に分ける。（図１）

「縮刷大蔵経」は、大蔵経としては初めて句読を施すことになり、高津は、律部101部、秘密部中の知律部の句読を担当した。[24] この仕事をしたことは、高津の図書館員としての活動に大きな影響を与えることになった。

2.2.4　高島易断

高島嘉右衛門は、幕末、明治期の実業家であり、鉱山経営、陶磁器商、鉄道敷設、ガス事業、学校建設、セメント会社に経営を行った。[25] また、高島易学の創始者である。高島嘉右衛門は1886（明治19）年、「高島易断」初版10冊を刊行している。高津は「高島易断」を執筆したとされる。[26] しかしながら、高島嘉右衛門関係の資料には、高津の名は見当たらない。[27]

高津は、放浪時代に合った人物の中で、特に印象に残っている人物として、副島種臣、福田行誠、元田永孚を挙げている。この３人について高津は「副島先生には神に対する心持がした。行誠上人には仏に接する心持がした。元田先生には古哲人に対する心持がした。」と語っている。[28] 副島種臣は、明治期の政治家。枢密院顧問官・同副議長、内務大臣等を歴任している。[29] 福田行誠は、幕末、明治期の浄土宗の僧侶で、73年、大教院教頭、増上寺70世、87年、知恩院76世、浄土宗管長を歴任した。[30] 元田永孚は、幕末･明治前期の儒学者,明治天皇の側近であった。[31] この３人に共通するのは、高島嘉右衛門との交流である。副島種臣、元田永孚は「高島易断」に序文を寄せており、[32] 福田行誠は神奈川布教の際に、横浜の高島嘉右衛門邸に宿泊し、時に易を依頼することもあった。[33]

2.2.5　成田図書館の主任になるまで

高島易断を執筆した後、高津は、京都に行き、真言宗醍醐寺で修験道を、真言宗智積院で密教を、浄土宗知恩院で性相学を学んだ。性相学とは、唯識と倶舎の教学のことを言う。[34] 知恩院で学べたのは浄土宗管長であった福田行誠との関係からだろうか。

その後、高津は、建築工事、鉄道工事、山林伐採、石炭採掘、セメント製造業、煉瓦焼、あるいは商人、狀師（他人の訴訟の代理をする人）、新聞記者、占い師に従事した。[35] 建築工事、鉄道工事、石炭採掘、セメント製造業などは、高島嘉右衛門も行っていた事業であり、高津は高島嘉右衛門の事業に関係していたのだろうか。

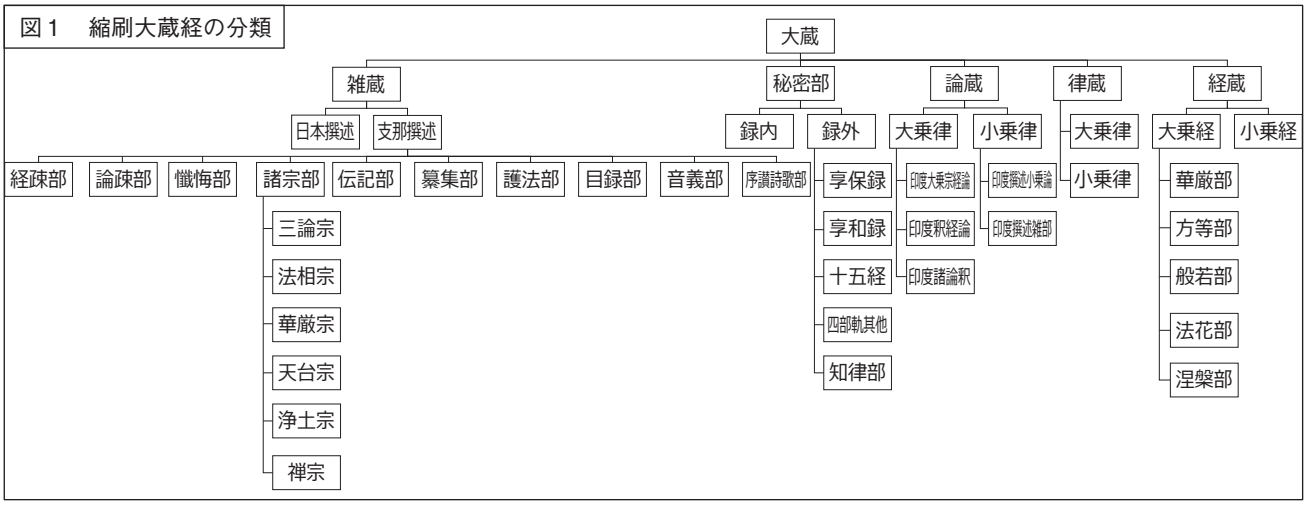
1900（明治33）年、高津は従来の関係を一切断ち切って、自ら清貧に甘んじたという。[36] 高津が成田図書館に招かれる前には、東京芝愛宕町、真福寺に設置された真言宗智山派宗務所の書記をしていた。[37]

３．成田図書館主任

3.1　成田図書館

成田山新勝寺貫首、石川照勤は1898（明治31）年３月から1900（明治33）年４月まで、欧米留学をしている。

図１　縮刷大蔵経の分類



留学の目的は、欧米各国の宗教事情の視察であるが、教育、文化、経済といった分野にも見識を深めた。石川照勤は帰国すると、まず図書館の建設に着手し、1902（明治35）年２月１日、成田図書館は開館している。館長の石川照勤は開館にあたって「本館は地方教育の普及を計り一般知識道徳の進歩発達を期せんがために、当初より閲覧料を徴せず繁雑なる規則も設けず、各種各階級の人の需要に応じて無制限に且殆ど無規則に其希望を満足せしめんと企画したり」と述べており、一般に開放された公共図書館として設立された。[38]

開館時、成田図書館の蔵書は、主に石川照勤の個人の蔵書と新勝寺が従来所蔵していた仏教書からなり、「公共図書館としての立場を堅持しつつ一方仏教図書館たるの面目をも併せ保って」いた。[39]

同年６月、高津は、成田図書館に招かれ、成田図書館主任となった。以後、1927（昭和２）年に退職するまで、成田図書館主任として活動した。[40]

主任として行った事業として、図書館報の発行、蔵書目録カードの作成、和漢書分類目録の刊行などがある。[41] 1922（大正11）年には、学制発布祝賀式に千葉県の図書館長を代表して参列、文部大臣より記念品を授与された。[42] 1925（大正14）年６月には教育功労者として、千葉県知事から表彰されている。[43]

3.2　日本図書館協会と高津

1902（明治35）年に当時、早稲田大学図書館司書であった加藤萬作が、成田図書館を訪問し、日本文庫協会(現、日本図書館協会)加入を勧誘した。[44] 1903（明治36）年８月１日より14日まで、日本文庫協会の主催により、大橋図書館において、第１回図書館事項講習会が開催されている。高津はこれに参加している。[45]日本文庫協会は、1906（明治39）年３月21日、東京帝国大学図書館で、第１回目の全国図書館員大会（後の日本図書館大会）を開催した。この大会において高津は成田図書館についての、講演を依頼されていたが、先の講演者の時間経過のための、演説を中止している。[46] 以後、高津は日本図書館大会に積極的に参加し、第２回、第７回、９回、12回、13回、17回、18回、19回、20回、21回、24回大会に参加している。[47]

1918（大正７）年の第13回大会は、高津の故郷である新潟県で行われている。この大会では、新潟県立図書館での開会式が行われ、積善組合合仁堂において協議会及び講演会が開かれている。大会２日目には、弥彦神社の参拝と信濃川大川津分水路工事の見学が行われている。[48]

1914（大正３）年５月、高津は「図書館雑誌」に「大蔵經の分類及び解題」という論文を投稿している。[49]

高津は、1922（大正11）年４月、図書館勤続満20年の功により日本図書館協会総裁より表彰され、[50] 1926（大正15）年には、日本図書館協会評議員に就任している。[51]

3.3　千葉県図書館協会の設立

高津は、1924（大正13）年10月14日、千葉市で開催された第１回県下図書館長会議に出席している。翌15日には同会議の参加者全員が成田図書館を見学している。[52]

1925（大正14）年７月25日、千葉県は、第１回図書館講習会を成田図書館で開催している。高津は、「仏書解題」という講義を受け持っている。この講義は、もともと、1924（大正13）年、文部省の依頼で、図書館員教習で６時間、講義を行うものであったが、石川照勤が危篤であったので、断ったものである。[53] 第２回図書館講習会でも、高津は「成田図書館稀覯書解題」という講義を受け持っている。[54]

早くから、高津は千葉県県下の図書館職員で組織する協会設立を主張していた。県立図書館司書の片岡小五郎とともに、その実現に努め、1926（大正15）年に千葉県図書館協会設立趣意書、会則案などを関係各所に送付し、11月17日、第2回県下図書館長会議の日に打ち合わせを行い、翌18日千葉市において、創立総会を開催した。協会総裁には千葉県知事、協会長は、千葉県学務部長が就任し、高津は副会長に選ばれた。同時に会則も決定され、会則では、この協会を千葉県図書館協会と称し、事務局を県立図書館内に置く。その目的は、「図書館事業に関する事項を調査研究し、本県に於ける該事業の改善発達を図る」ことであるとされた。[55]

このような府県単位の図書館組織が初めて結成されたのは、1920年の和歌山県である。岩猿敏生によれば、府県図書館協議会は府県立図書館が中心になって組織され、会長、副会長には県の幹部職員がつく事例が多いと指摘している。また、そのため、図書館員の自主的な専門職による組織であるよりも、官僚体制による官僚的組

織であったと言えるとしている。[56] 千葉県図書館協会の場合、発起人は高津と千葉県立図書館司書の片岡小五郎であるし、協会総裁は千葉県知事、協会長は、千葉県学務部長であるが、高津が副会長に就任するなど、他府県と設立の状況が異なる。

3.4　仏教書の分類

成田図書館主任となった高津は着任に当たり、図書館事業の経験がなかったので、1902（明治35）年10月、東京の各図書館、文庫を見学した。各図書館訪問中、また文庫協会席上、大学図書館員から高津に対し、仏教書の分類が困難であることを聞き、高津は、この問題の研究に取り掛かることになった。[57] これに関連してか、1905（明治38）年春には、高津は南都仏教図書館と京都の大学付属図書館を視察している。[58]

明治30年代から40年代に日本で知られていた近代図書分類法は、デューイ（Dewey,Melvil）の十進分類法（1879年）とカッター（Cutter,Charles Ammi）の展開分類法（1879年）であった。日本十進分類法（1929年）はまだ作成されていなかった。[59]

日本の図書館で、近代的な資料の分類法が初めて使用されたのは、1876（明治９）年、東京書籍館で、６門分類が用いられた。帝国図書館では、全体を８門に分ける８門分類法が用いられた。宗教については、第一門　神書及ビ宗教を設け、その下に

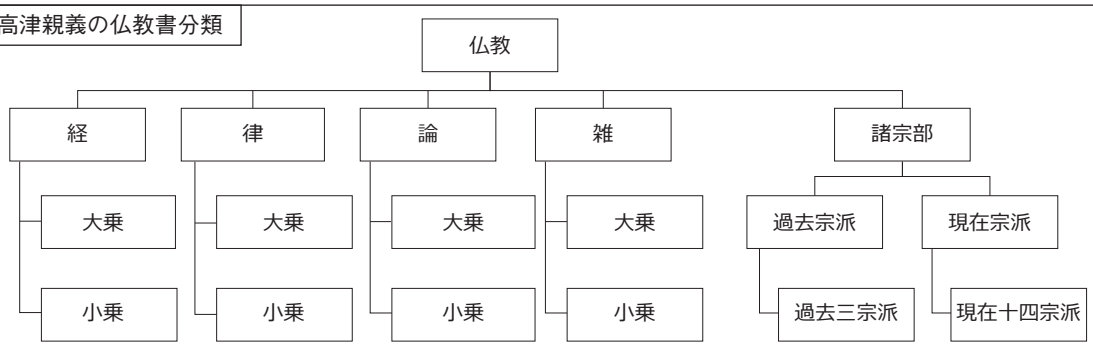
一　総記
二　神書
三　仏教
四　基督教
五　雑教

と分類していた。[60]

高津は、成田図書館の仏教書目録の編纂に取り掛かった時、最初に、仏書門を大別して、顕教部、密教部、雑部の三部としに、顕教部を経部、律部、論部に分け、密教部を事相部、教相部に、雑部を印度撰述附外道論、支那撰述、諸宗部、伝記部、纂集部、護教部、目録部、音義部、序讃詩歌部に分けている。この分類で大抵の仏教書を分類できると考えたが、成田図書館は宗派の性質上、密教に関する資料が多く、あるいはまったく資料がない分野もあり、この分類では秩序ある分類をなしえない。そこで仏教書を密教部と顕教部に分け、密教部を事相部、教相部に、顕教部を華厳部、法花部、唯識部、起信論部、因明部、倶舎部、諸経釈部、諸論釈部、律部、伝記部、雑部、新刊大蔵経部に分けた。[61]

前述のように、高津は、第１回図書館講習会で、「仏書解題」という講義を受け持っている。題は仏書解題であるが、内容は仏教書の分類であった。この講義の内容は、後に「智嶺新報」の連載でまとめられている。この中で、高津は、成田図書館が印刷目録第一編を刊行するにあたり、仏教書の分類を作った。これは決して理想的ではない。ただ成田図書館の目前に堆積した仏教書を処理するためだけの便宜的なものに過ぎなく、理論に一致したものではない。故に、どこの図書館にもあてはまるというものではない、としている。また、仏教書分類の十進分類法の採用について、普通の図書館においては、仏教書は余り多くないから、十進法の分類で差支えないとしながら、仏教専門学校や成田図書館のように、多くの仏教書を所蔵する図書館では、仏教という一門を建て、その下に経、律、論、雑を設け、その下に大乗、小乗を設け、この第２段の経律論と並べて、諸宗部、その下に過去宗派、現在14宗派を置くべきであるとしている。（図２）高津は、仏教書の分類が、根本的に無理であり完全

図２　高津親義の仏教書分類



なる分類ができない。仏教書を十進法という箱に収めることは、魔法でも用いない限り不可能である。中身に従って容器を作るのではないと、一定の容器を作って、様々な内容物を入れようとするから、そこに無理が生じてくるのは当然であるとしている。[62]

高津は、図書分類法は、全国共通の分類法を用いるべきだと考えていた。成田図書館は一般に開放された公共図書館としての側面と仏教の専門図書館としての２つの側面を持つ図書館である。公共図書館には、どの図書館にも共通した簡便な資料の排架方式が求められたため、「共通分類」の必要性が認められた。一方、専門図書館では、図書館の目的が個別的であるため、個別化した分類が求められる。十進分類法を用いた一般図書の分類体系に仏教書の分類を組み込むことは実務として適当ではない。成田図書館の仏教書の目録を作成するにあたり、仏教書だけを別の分類法を作り分類している。成田図書館の設立母体である新勝寺の性質上、密教関係の図書が多くなるため、成田図書館の仏教書の分類は、他の図書館では採用できない。高津は、全国の図書館で使用できる仏教書の分類法を模索し、かって自らが係わった「縮刷大蔵経」の分類を基にして、分類法を作成した。しかし、これも高津の満足のいくものではなかった。

3.5　図書館知識の普及

高津は、その国の文化を測る唯一の指標は、国民教育機関である図書館であるということは、一面の真実である。なぜなら、学校教育や、他の機関であっても、知識の供給について、制限的なものであって、図書館は全ての知識を供給するからである、と述べている。[63]

しかしながら、明治30年代には人々の図書館に対する認識は低かった。成田図書館創立当時、石川照勤は図書館設立に熱心であったが、新勝寺内の幹部の人達は何ら理解が無く、冷遇されていたと高津は語っている。これは新勝寺の幹部だけでなく、世間一般の考え方であって、図書館の使命を正当に理解していた人は極めて少なかった。それ故に、図書館に金を出す人も少なく、図書館に従事する人の社会的地位も低かったとも言っている。[64]

しかし、大正末期頃には、教育の中心は図書館でなければならないというところまで世間一般から認識されるようになったと高津は述べている。また、文部省の書類上、全国の図書館は約4000に近い数字になっており、図書館は相応の発達をとげている。しかしその内容は、はなはだ心細い感があるとしている。千葉県でも、学校の施設は相当に整ってきたのであるが、図書館はすこぶる幼稚な状態にあるのは、図書館側の努力が足りないからではあるが、当局も、教育家も一般識者も責任の一部を負うべきであろうと思うと述べている。[65]

高津は、そのような現状認識にあって、図書館知識の普及に努めている。前述の千葉県図書館協会の設立もその一環であるが、一般向けに図書館がなぜ必要なのか講演している。[66] その中で、高津は、図書館の必要性を以下のように、６つに分けている。

1　図書館は研究を行う上で必要であるとする。学校は読書力を教育するだけである。学校で得た読書力を図書館で利用して、初めて研究者となることができる。もし世の中に図書館がなければ、研究上４つの困難が生じるとする。

①　書類選択難（個人では様々な図書を収集して、その中から目的の書物を選択することはできない）

②　図書保存難（完全な書庫を持っていない人が多い）

③　閲覧室なき困難（閑静な読書室を持っていない人が多い）

④　資金（図書購入難）

以上は読書家の4大難であり、これを解決するために図書館があって、初めて研究ができるとする。

2　図書館は調査を行うで上で必要であるとする。調査を行うには、辞書類、類書、叢書などが必要で、これらがなくては十分な調査ができない。だから図書館は、調査に必要と認めたものは、網羅的に収集しているとしている。

3　社会風致上の必要性。図書館が簡易に、無料で、有益で興味ある図書を供給すれば、社会風致上、大きな利益をもたらす。閑暇を善良な読書に導くことは、社会改良に意義があることは、見逃すことはできない事である。よって図書館は、専門的な図書を所蔵すると共に、通俗的な身近な図書を購入して、需要に応えることに努めるのであるとしている。

4　レクリエーションの場としての必要性。日本には、元来、国民的娯楽が少ない。日本では大都会に水族館、動物園、パノラマなどがあるが、そのような場所を除

けば、教育に資すべきものがない。これらの欠点を補うのは、通俗図書館が最も有益で、また必要である。図書館は誰でも、来館し、自らの好むものを見ることができる。また文字が読めない者でも、絵を見るだけでも、相当の理解、感化、趣味を与えることができるとしている。

5　貴重書の保存。博物館で貴重品を保護するように、図書館は貴重書を保護することができる。もし貴重書を個人で保管すれば、恐らくは無くなってしまうだろう。

6　地方の装飾としての図書館。日本には、元来、建築物で観るべきものが少ない。図書館は各市町村において唯一の善良といえる物であるとしている。

この内容は「私立米本図書館開設一周年紀念報」にも掲載されている。1907（明治40）年８月の、米本図書館を開館にあたり、館長の米本信吾は成田図書館に相談に行き、高津が派遣され指導している。[67]

新潟県にある積善組合が、1908(明治41)年に巡回文庫(積善組合巡回文庫)を設立するに当たって、全国の巡回文庫を調査している。その際、成田図書館を訪問し、高津に聞き取りを行っている。[68]

４．仏教研究者としての高津

高津は、成田図書館に勤務する傍ら、石川照勤の相談役として、成田山教学の仕事にかかわり、山内の教育にも当たった。高津には仏教関係の著作として、「成田山通志」[69]『護摩法の研究』[70]『秘密儀軌解題』[71]「大蔵分類目録並解題」[72]「成田山大聖不動明王」[73]等の著作がある。「成田山通志」は新勝寺史を記述した書のなかで、最も学術的に考究された画期的なものであると評価されている。

『秘密儀軌解題』は「智嶺新報」と「我」に連載された、密教儀式と規範書についての解題である。

1914（大正３）年５月、『図書館雑誌』に高津の「大蔵經の分類及び解題」が掲載されている。これは論文ではなく、高津が「大蔵分類目録並解題」を著述する経緯が書かれているものである。高津は大蔵経の完全な分類目録を作り、これに簡単な解題をつけて、大意、価値、考証を説明すれば、閲覧者の労力を省いて非常に便利である。便利になれば、研究者も非常に増加して、大蔵経も新しい生気を発揮して、仏教界のみならず一般の学術界に貢献することになるだろうと述べている。この「大蔵分類目録並解題」は1912（大正元）年６、７月より着手して、年末までに大乗経５部の初稿を脱稿している。「大蔵分類目録並解題」は高津が存命中には、公表されることがなく、その原稿は1932 ～ 1933（昭和７、８）年頃、高津から神崎照恵に預けられ、1962（昭和37）年、原本とコピー版が成田図書館の蔵書とされた。

「成田山大聖不動明王」は、初めて教理に基づいて成田山信仰を組織的に明らかにしたもので、貴重であると評価されている。この著作は、神崎照恵によって、1981（昭和56）年に刊行されている。

高津の仏教関係の著作の多くが、成田不動尊信仰に関するものである。田中久夫は、不動尊信仰は、信仰者が多いにもかかわらず、その研究は少ないと述べている。[74]高津は不動尊信仰を学術的に研究した初期の研究者と言える。

５．成田清聚学院

近世において、視覚障害者は「当道座」という全国組織の団体に入る政策が執られていた。当道座は南北朝の初め、足利氏の姻戚であった、明石検校が設立したと言われる。当道座の中央本部「職屋敷」(清聚庵)は、京都佛光寺の北隣にあった。[75]

1693（元禄６）年、杉山和一検校が江戸で「杉山流鍼治導引稽古所」（後の鍼治講習所）を開いている。これは「世界で最初の盲教育機関」というべきものであった。

1871（明治４）年に、政府は当道座を廃止し、これにより鍼治講習所も消失した。つまり盲教育機関が廃絶したのである。[76]

前述の大内青巒は、1879年には盲聾唖者の築地訓育院高等普通学校の設立に尽力している。[77]

1911（明治44）年８月、内務省により「按摩術営業取締規則」、「鍼治灸術営業取締規則」が発布された。これにより按摩を営業する者に試験または指定学校の卒業が義務づけられた。視覚障害者の場合は２年間の修行の後、受験資格があり、また当分の間、視覚障害者に限り、履歴を審査し、受験しなくても免許鑑札を交付することができるという特例が付与されていた。しかしながら、視覚障害者が、医学知識や鍼按技術を学ぶ施設は、法律・

制度上何も用意されてはいなかった。

このような背景の中で、成田清聚学院は設立されたのである。

明治30年～40年代にかけての成田は、成田鉄道の開業により、新勝寺の参拝客が増加し、参拝客のための按摩師も増え、町内で5、60名に達していた。1906（明治39）年11月７日、高津は、開業医高川直三郎、関川安太郎、山内平治郎とともに、按摩師の資質の向上のため、解剖、生理、病理学の初歩、修身、国史、俳句などを講義するため、成田山鍼治按摩講習会を発足させた。1907（明治40）年、高津は「智嶺新報」に『日本鍼治按摩術紀元及沿革』という論文を投稿している。[78] 1911（明治44）年12月、訓盲学院設立の願いを県庁に申請し、1912（明治45）年１月16日に私立学校令に基づき、文部大臣より認可を得、ついで千葉県知事より指定され、「成田清聚学院」と名付けられた。これは千葉県下で最初の私立の盲学校である。高津は学院長となり、1936（昭和11）年11月２日、高津が亡くなるまで院長を続けた。高津は私財を擲って経営にあたった。これらの誠意が認められ、宮内省及び県知事より御下賜金や奨励金を、また千葉県福祉協議会より共同募金等の助成金下付の特典が与えられ、その功績は高く評価された。高津70歳の折に成田清聚学院の経営にあたった功績を称え、「高津親義翁紀徳碑」が建立されている。

三好一成は、視覚障害者を対象とした教育施設はその発足の契機からを考えた場合、教育を主体として発足したもの、職業を主体として発足したもの、両方の要素を発足したもの、と大別できるとし、成田清聚学院は、職業を主体としたものであるとしている。[79]

６．まとめ

高津は、幕末に生まれ、幼少時に僧侶になり、長善館で漢学を学んだ。長じて上京し、真言宗の教育施設に学び、また京都の諸寺で仏教を修めた。高津の教養の基礎には、漢学と仏教学があった。漢学と仏教学を修めたことにより、「縮刷大蔵経」の句読を担当することができた。様々な職業に就いた後、石川照勤に見いだされ、成田図書館の主任となった。主任として館務の中心となる一方、図書館員としての問題意識として、仏教書の分類法の確立と図書館知識の普及があった。仏教書の分類について、十進分類法ではなく、大蔵経の分類を基礎とした分類法を主張している。このことは、「縮刷大蔵経」の句読を担当したことが大きく影響している。また、高津は、図書館員として、千葉県図書館協会の設立、図書館講習会の講師、他の図書館への指導等、図書館に関する知識の普及に努めた。これにより千葉県内に図書館に関する知識が広まった。これは高津の図書館員として最も大きな業績である。

仏教研究者として、高津は成田山の不動尊信仰を明らかにした初期の不動尊信仰の研究者であった。

また成田清聚学院を設立し、職業教育を中心とした視覚障害者教育の先駆者であった。

高津の放浪時代については不明なことが多い。高津の放浪時代を知ることは、高津の思想形成上重要なことであるので、今後の研究課題としたい。

謝辞

最後に本稿執筆にあたって、成田山仏教図書館、千葉県立中央図書館、千葉市立中央図書館、新潟県立図書館、新潟県立公文書館の皆様に、資料の収集・調査に多大なご協力をいただきました。深くお礼を申し上げます。

参考文献

(1) 高津親義「成田山大聖不動明王」成田山仏教研究所　p.3　1981.
(2) 分水町「分水町史　資料編Ⅳ　民俗・人物」分水町　p.547 2003.3.
(3) 望皐吟士『ベル・エポックの志　－成田山仏教図書館のそもそも－』「専門図書館」N0.270　p.9 2015.5.
(4) 高津親義『追憶と報恩』「図書館雑誌」No80　日本図書館協会 p.4 1926.5.
(5)『高津親義理事略歴』「新更」第７巻　12号　p.12　1936.12
(6) 分水町「分水町史　通史編」分水町　p.397　2006.3

(7) 千葉毎日新聞社「房総人名辞書」p.235 1909.10.
(8) 前掲(2) p.547.
(9) 前掲(5) p.12.
(10) 前掲(6) p.431.
(11) 今澤慈海（編）「成田図書館周甲記録」成田図書館　p.308　1961.8.
(12) 池田雅則「私塾の近代　越後長善館と民の近代教育の原風景」東京大学出版会　p.21　2014. 1
(13) 前掲(11) p.308.
(14) 前掲(6) p.384-385.
(15) 新潟県教育委員会「長善館学塾史料」下巻　新潟県文化財調査報告書　第14巻　新潟県教育委員会　p.208-235.　1974
燕市長善館史料館「越北の鴻都「長善館ものがたり」 人物に見る八十年のあゆみ」 燕市教育委員会　p.88-89.2009.
長善館史蹟保存会「長善館余話」長善館史蹟保存会　p.194 ～ 202,　p.203-203　1987.
(16) 前掲(12)
(17) 村山正榮『智積院史』弘法大師遠忌事務局　p.91　1934.4.
(18) 前掲(11) p.308.
(19) 成田図書館「成田図書館八十年史」成田山文化財団成田図書館　p.72 1981.6.
(20) 攻玉社学園「攻玉社百五十年史」2013.3.
攻玉社学園「攻玉社人物誌」攻玉社2013.3.
攻玉社学園「攻玉社百二十年史」1983.
攻玉社学園「攻玉社百年史」1963
攻玉社「攻玉社九十年史」1953.
(21) 高津親義『故服部少僧正畧傳』「秋の聲」無學吟社　p.98　1911.8.
(22) 今泉淑夫「日本仏教史辞典」吉川弘文館　p.33　1999.11.
(23) 高津親義『仏書解題（仏書分類法）』「智嶺新報」No297 智嶺新報社　p.3 1925.12.
(24) 前掲(23) p.3.
(25) かすみがうら市郷土資料館「日本近代化の父高島嘉右衛門　企画展　平成27年度」p.3　2015.7.
(26) 前掲(11) p.308.
(27) 紀藤元之介「易聖・高島嘉右衛門　乾坤一代男　人と思想」東洋書院　2006.
松田裕之「高島嘉右衛門　横浜政商の実業史」 日本経済評論社　2012.
持田鋼一郎「高島易断を創った男」新潮社　2003.
紀藤元之介「易と金と事業と　易豪高島嘉右衛門」久保書店　1966.
細野生二「望励台在塾記」執筆年不明　横浜開港資料館所蔵.
(28) 高津親義『追憶と報恩』「図書館雑誌」No80　日本図書館協会 p.4 1926.5.
(29) 国史大辞典編集委員会「国史大辞典　第13巻（ま～も）」吉川弘文館　p.610　1992.4.
(30) 日本仏教人名辞典編纂委員会「日本仏教人名辞典」法蔵館　p.689　1992.1.
(31) 国史大辞典編集委員会「国史大辞典　第８巻（す～たお）」吉川弘文館　p.834　1987.10.
(32) 高島呑象「高島易断　巻之一」高島嘉右衛門　1886.11
(33) 芝蓮山人『行誡上人を思ふ』「平成新修福田行誡上人全集」第７巻（研究篇）USS出版　2012.3
(34) 中村元「佛教語大辞典　上巻」p.714　1975.2.
(35) 前掲(7) p.235.
(36) 前掲(11) p.308.
(37) 前掲(19) p.72.
(38) 前掲(11) p.45-46.
(39) 前掲(11) p.344.
(40) 大野政治『図書館事業と訓盲教育に生涯を尽くした高津親義先生　千葉県の教育に灯をかかげた人々　102』「千葉県の教育に灯をかかげた人々　第２巻」千葉県教育会館維持財団文化事業部　p.48　1989.11.
(41) 前掲(40) p.48.
(42) 前掲(11) p.308.
(43) 千葉県教育会「千葉県教育史　巻５」青史社　p.514　1979.
(44) 加藤萬作『嗚呼御前様』「不亡録」望洋吟社　p.142　1925.1.

(45) 坪谷善四郎「大橋図書館四十年史」博文館p.67-70　1942.9.
(46) 前掲(11) p .67.
(47) 前掲(11) p .67.
「図書館雑誌」No15　日本図書館協会　p .87　1912.7.
「図書館雑誌」No18　日本図書館協会　p .57　1913.9.
「図書館雑誌」No21　日本図書館協会　p .53　1914.8.
「図書館雑誌」No31　日本図書館協会　p .53　1917.6.
「図書館雑誌」No36　日本図書館協会　p .52　1918.10.
「図書館雑誌」No50　日本図書館協会　p .52　1922.7.
「図書館雑誌」No60　日本図書館協会　p .14　1924.7.
「図書館雑誌」No67　日本図書館協会　p .17　1925.5.
「図書館雑誌」No84　日本図書館協会　p .18　1926.11.
「図書館雑誌」22巻5号　No101　日本図書館協会　p .118　1928.5.
「図書館雑誌」No128　日本図書館協会　p .166　1930.7.
(48)『第十三回全国図書館大会記事』「図書館雑誌」第36号　日本図書館協会 p.45-46　1918.10.
(49) 高津親義『大蔵經の分類及び解題』「図書館雑誌」第22号　日本図書館協会 p.28-31　1914.11.
(50) 前掲(11)　p .308.
(51)「図書館雑誌」No82　日本図書館協会　p .12　1926.9.
(52) 前掲(11)　p .115.
(53) 高津親義『仏書解題（仏書分類法）』「智嶺新報」智嶺新報社　No296 p.4 1925.11.
(54) 千葉県図書館協会『千葉県図書館協会報』第1号　p.17　1927.11.
(55) 千葉県図書館史編纂委員会「千葉県図書館史」千葉県立中央図書館 p.51-55 1968.9.
(56) 岩猿敏生「日本図書館史概説」日外アソシエーツ　p.　207　2007.1.
(57) 前掲(11)　p .257.
(58) 前掲(11)　p .67.
(59) 椎名六郎「新図書館学概論」学芸図書　p .266　1973.3.
(60) 前掲(59)　p .267.
(61) 前掲(11)　p .257.
(62) 高津親義『仏書解題(仏書分類法)』「智嶺新報」智嶺新報社　No296-299 1925-1926.
(63) 高津親義『讀書週間に就いて』「千葉教育」千葉県教育会　No415 p.21-23 1926.11.
(64) 高津親義『讀書週間號の發行を祝して』「千葉教育」千葉県教育会　No403 p.3-4 1925.11.
(65) 高津親義『讀書週間に就いて』「千葉教育」千葉県教育会　No427 p.5-6 1927.11.
(66) 高津親義『図書館の効用』「智嶺新報」No70　智嶺新報社 p.40-44 1906.12
(67) 私立米本図書館『私立米本図書館開設一周年紀念報』米本図書館　1908.
(68) 鷲尾義房「図書館視察概要」積善組合　p.13-19 1908.
(69) 私立成田図書館「成田山通志」成田図書館　1911.
(70) 高津親義『護摩法の研究』「新更　日本佛教の研究 特別號第３輯」新更会刊行部　1936.12.
(71) 高津親義『秘密軌儀解題』「智嶺新報」智嶺新報社　No300-308 1926.10-1926.11.
高津親義『秘密軌儀解題』「我」2巻1号，3号　菩提樹社 1927.
(72) 前掲(49)
(73) 前掲(1)
(74) 田中久夫『不動尊信仰の研究成果と課題』「不動信仰」雄山閣　p .351　2007.5.
(75) 鈴木力二「図説盲教育史辞典」日本図書センター　p .9　1985.
(76) 岸博美「視覚障害教育の源流をたどる　－京都盲唖院モノがたり」p.16　2019.7.
(77) 前掲(76) p.25.
(78) 高津親義『日本鍼治按摩術紀元及沿革』「智嶺新報」No71 智嶺新報社　p.35-40 1907.1
高津親義『日本鍼治按摩術紀元及沿革（承前）』「智嶺新報」No72　智嶺新報社 p.38-44 1907.2
(79) 三好一成『私立成田清聚学院の設立と展開』「千葉県社会事業史研究」第２号　千葉県社会事業史研究会1980.